太宰府の文化財 422

通古賀の瓦（近現代）
―大宰府条坊跡第322次調査―

かつて通古賀地区には2軒の瓦屋がありました。その操業時期や窯の形など、詳細についてはよくわかっていませんでしたが、平成29年（2017）に行った発掘調査によって、操業していた瓦屋のうちの1軒と考えられる窯跡が見つかりました。今回は、この発掘調査で見つかった窯跡と瓦について紹介します。

調査で見つかった窯はすでに上部は失っており、下部のみが残っている状況でした。窯は平面が楕円形状をしており、中央の一番広い空間は瓦を焼く焼成室で、窯の両端には薪をくべるための焚口（たきぐち）がついていました。この構造から、窯跡は「だるま窯」であったことが分かりました。名称については、窯の形から達磨（だるま）が座っているように見えることに由来します。

出土した瓦は、「燻（いぶ）し瓦」というもので、焼き締め時に燻すことで、表面が黒銀色に鈍く光る瓦です。調べてみると、いくつかの瓦に文字があることが分かりました。いずれも瓦の側面に「通瓦徳」という印が押されています。文字から推測すると「通」は、この地が通古賀という地名であることから、製作地を記したものと考えられます。「徳」の文字についてですが、地元の方から有力な情報を得ることができました。それは、その昔に徳三郎という人物がおり、瓦屋と呼ばれていたというのです。このことから、「徳」は製作者の名前の一部を記したものであることが分かりました。ここで作られた瓦は地元である通古賀村のほかに水城村、二日市町へ運ばれていったそうです。

地域の屋根を支えた瓦屋は、終戦の後ほどなくして操業を停止します。大量生産を可能とする工場が登場したことや、工場と個人経営とでは製作にかかるコストの開きが大きかったことが理由と考えられます。こうして通古賀での瓦製作は工場に委ねられ、瓦窯はその役目を終えたのでした。

今では住宅地となっていますが、当時の通古賀では、瓦窯から煙が上がる日常が当たり前の風景でした。発掘調査で見つかった窯跡と瓦は、そんな当時の様子を教えてくれる貴重な宝であり、通古賀の重要な歴史の一つなのです。

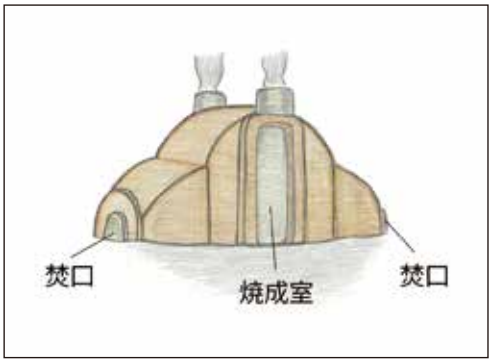
文化財課　中村　茂央

「通瓦徳」

瓦に残された「通瓦徳」の印の部分

出土した瓦

瓦窯出土状況



だるま窯イメージ図

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
UD FONT by MORISAWA